

井上正道氏（籃胎漆器塗師）の話を聴く（一）

聞き手 狩野 啓子（久留米大学文学部国際文化学科）
筆録・編集 大庭 卓也（同）

籃胎漆器は、竹を編んだものを素地として漆を何度も塗り重ね、編み目の模様を研ぎ出したもので、言うまでもなく久留米が誇る伝統工芸のひとつである。諸説はあるものの、この工芸は、明治二十年（一八八七）前後、久留米市郊外の山川村で清酒業を営み茶人でもあった豊福勝次、同山本村で竹細工の名工として知られた近藤幸七、そして久留米藩御用塗師の流れを汲む川崎峰次郎の三者の協力によって誕生したのと言われている。しかし、現在流通している籃胎漆器の多くが、中華人民共和国で製作した輸入品で、久留米の地で作られたものは希少であるという話を耳にして、すでに久しい。

寒さも少し緩んだ二月二十四日、筑後地方の真竹を用い自身の工房で籃胎漆器を制作し、「日本製」を守り続ける、井上らんたい漆器（久留米市小頭町）

りよつたと聞いております。

狩野 江戸時代から、久留米藩の漆塗りの評判は高かったみたいですね。では、井上さんのお家は、もともと家業としての塗師だったと。

井上 そうです。川崎峰次郎は有馬の殿様に仕えた塗師ですから、井上の家が師弟関係にあったということはないです。明治時代になって旧久留米藩士の救済のために、有馬の殿様が始めた赤松社あかまつしやというのが、今の久留米の裁判所あたりにあったらしいですが、そこで籃胎漆器を作りたいと殿様が言われたということで。漆器のほかにも、久留米絣や和傘なんかの製造販売に力を入れていたと聞いています。

狩野 りっぱな殖産興業ですね。市役所の近くにも和傘を貼るところがいっぱいあったと聞きますものね。それで明治四十一年（一九〇八）に、お爺様の熊吉さんが、その赤松社の「籃胎漆器部門職長」になったと。



狩野啓子氏

井上 ええ。小さいところも含めて、たくさん籃胎漆器を作っておったところ。ところが、あの第二次大戦が終わってですね、有馬の殿様が赤松社を解散しますと。終戦直後ですね。それで、赤松社の職人さんたちと一緒に、井上らんたい漆器という会社を始めたんです。昭和二十一年（一九四六）のことです。狩野 赤松社が、筑後の地場産業として籃胎漆器に力を入れて製造販売したのは、やはり近くで漆が採れるからですか。

井上 戦時中は漆も配給になって。私の父の井上隆人、熊吉の長男ですが、配給のときは父が商工会議所で、漆をへらでクルクルとすくって分けていたと言っていましたかね。それで、「九州でも漆は採れよつたとね？」と父に聞きましたら、「昔は採れてたけれども、戦後すぐから採れるところは無くなった」と言っていました。

狩野 そういう九州の漆で、籃胎漆器を作ってたんですかね。井上 そうですね。ただ、もう大正、昭和に入った頃から、中国から輸入した漆も日本へ入ってきてたんだらうと、私は思うんですけどね。

狩野 熊吉さんが、昭和天皇御即位の時の献上品として籃胎漆器の屏風を製作していた昭和二年（一九二七）の写真が、あそこに飾ってありますね。

を訪れ、籃胎漆器塗師の井上正道氏のお話を親しくうかがう機会を得た。その様子を、今号から三回に分けて紹介することとしたい。（大庭）

赤松社と籃胎漆器

狩野 ご無沙汰しております。今日は色々なお話をうかがえると思って、楽しみにして参りました。よろしくお願ひいたします。早速ですが、井上らんたい漆器さんのホームページを拝見しますと、明治十八年（一八八五）年頃、井上さんのお爺様、すなわち井上熊吉さんが塗師の道に入ったとありますが、熊吉さんは、籃胎漆器の創製に深くかかわった川崎峰次郎のよ

うな久留米藩御用塗師の人々に技術を学んだのですか。

井上 いえ、私の家は商家で、筆笥たすなんかを作っていたらしいです。それで塗りのほうもしていたんです。刀の鞘さやなんかも塗



井上正道氏

井上 漆器はですね、生地作り、下塗り、中塗り、上塗りと分業作業でやってゆきますので、最後の仕上げの上塗りの職人が、どうしても前面に出ることになって、職長ということになるんですね。

狩野 やはり最後の仕上げに関わる人が一番力を持つと。

井上 ええ。有馬の殿様に仕えた塗師の川崎峰次郎さんの御子孫は、現在もお客様としてご来店いただいておりますけど、峰次郎さんが明治三十七年（一九〇四）に亡くなったあと、その子供さんとかご兄弟が籃胎漆器を続けようとしたけども、結局続かなかった。それなら籃胎漆器が途絶えてしまうということと、有馬の殿様が赤松社で作らせると仰ったそうです。そして赤松社と同じ頃に、資産家の篠原倍蔵さんという人が、久留米籃胎漆器合資会社——久籃社と言っていました——を設立されて。そのほか、多くの職人さんたちも、自分たちで籃胎漆器を作り始めたと聞いております。篠原倍蔵さんは、商工会議所の会頭もなさった人です。その御子孫も、以前、私たちの工房に遊びに来ていただいております。

狩野 明治の終わりから大正にかけて、籃胎漆器を作る会社はたくさんあったんですね。

井上 左から三番目が熊吉です。あの献上の主体は、有馬の殿様です。有馬伯爵がいたから、籃胎漆器の屏風献上の依頼を受けることもできたんです。

狩野 赤松社が最も栄えていた時期は、その頃ですか。

井上 そうだと思います。明治の終わりから昭和の初めにかけて、ドイツ、フランス、イギリスなどのヨーロッパ、中国、朝鮮、台湾などのアジア諸地域にも籃胎漆器をどんどん売っていたようですね。赤松社と云えばですね、もと赤松社にいて後に私たちの工房で九十歳まで働いてもらっていた職人さんが言っていたんですが、「赤松社で働いていた職人たちは、久留米の旧藩士の人たちが多かった。武士



色とりどりの商品が並ぶ井上らんたい漆器の店内

出身の人たちだから、お話を歌いながら作ったんだから、仕事をするというものんびりしたもんじゃない」と。そして仕事場には、ステッキをついて来る人もいた、なんてことも聞いておりますね。それから、洋画家の坂本繁二郎さんから父が漆器の注文を受けて、お宅まで商品を届けに行っていました。私も行ったことがあります。それで父に、「どうして坂本さんのことを知ってるのか？」と聞いたら、「赤松社の意匠部には、有馬の殿様が、東京美術学校（現在の東京芸術大学美術学部）出身の人を雇っていて、坂本さんはその人を訪ねてよく遊びに来られていたから、知っているんだ。坂本さんは、美校出身の人たちとバイオリンを弾いて楽しんでたよ」と言っていました。



昭和天皇御即位（御大典）の献上品屏風製作時の記念写真（昭和二年）

狩野 お話とかバイオリンとか、赤松社には文化的な雰囲気があったんですね。それで戦後に赤松社が解散になって、昭和二十一年にお父様の隆人さんが、赤松社の職人さんと一緒に、井上らんだい漆器を始めた――。
井上 ええ、そうです。私が子供の頃はまだ、赤松社の社員だった人が何人もいらしていました。（続く）

（注1）赤松社 廃藩置県のあと、旧藩主有馬頼威の出資で設立された、困窮する旧久留米藩士の救済のための殖産組織。明治十六年（一八八三）開業。
（注2）お話し 能の詞章。謡曲。能を舞い、謡曲を歌うことは武士の教養のひとつ。

日本製籃胎漆器
井上らんだい漆器
福岡県久留米市小頭町六・二三
〇九四二・三九・五四五四
<https://www.inouerantai.jp>



久留米大学文化財保存科学研究部会

〒839-8502 福岡県久留米市御井町1635

<http://kurumbunkazai.jp/>

令和4年3月20日発行

印刷：城島印刷株式会社

〒810-0012 福岡市中央区白金2丁目9番6号

伝統工芸の国・筑後

第三号

井上正道氏（籃胎漆器塗師）の話を聴く（一）